

鳥屋野潟の利用の変遷に関する研究調査

新潟市南商工振興会

概要

■研究の目的

80万人都市新潟市の都心にある、約160haの鳥屋野潟の真ん中に入ると海のような広さで感動する。近年、潟の南部にサッカー場や食育花育施設などスポーツレクリエーションの公園が整備され、2015年には潟の北部や東部に湖岸堤防の整備計画が決定した。このような状況の中で、本研究調査の目的は、潟の水環境の変化が潟の利活用の変化にどのように影響したか、その遷移の考察の中で、都心に残された潟湖の自然の復元と湖面や潟辺の活用課題など明らかにし、潟のあり方を探ることである。

■研究の内容

本研究では、右図のように潟の昭和20年代、40年代、平成20年代の比較で、潟の水位や水質環境の変化と利活用変化との関係を探った。

水面域やヨシ原の変化、写真等から利活用場所の特定、潟辺の旧住民ヒアリングなどで、潟の利活用変遷を比較し、その特性を把握した。また、潟の利活用の先進事例調査を行い、今後の利活用の提案イメージにまとめた。

■研究の進め方

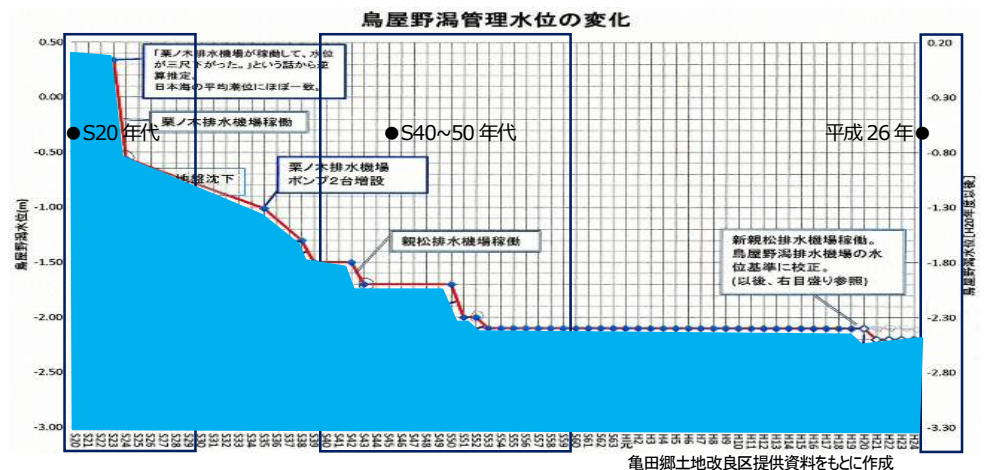
研究計画では当初ヒアリングやデータ収集により潟の利活用数量を定量分析する計画だったが、公的機関以外で過去の記録データを周辺市民から収集するのは困難であるため、比較データを定性的にまとめ、精度の高い調査は今後のテーマとした。特に、山潟地区をはじめ、清五郎、上沼、小張木、女池など各地区集落の健在な高齢者キーマンからヒアリングやデータ入手で協力を得ることができた。また、亀田郷土地改良区から出版した図書に使われた写真も提供いただき潟利活用の時間、空間の遷移の構造的な把握が可能になった。

■まとめ概要

鳥屋野潟は、昭和20年代まで海とつながっていて海の魚類も収獲でき、潟の24時間365日に生産と暮らし、遊びが潟と一体となっていた時代だった。その後、戦後間もない頃に整備された大規模な排水機場により水位が下げられ、乾田化が進み、機械化近代農業に転換した時代になる。追うように都市膨張の波で潟周辺が宅地化し、農業排水や生活排水で潟の水質が悪化した時期を経て現在の潟がある。

本研究では、集落共同体で潟と暮らしが一体化し潟資源を最大限活用していた昭和30年代までから、価値観の多様化や移住者の増大による都市化で地域と潟との縁が薄れ、汚濁が進み、潟の利活用が衰退した昭和40～60年代、潟北部に文化施設、南部に大規模なスポーツレクリエーション施設、高速道アクセス整備により飛躍的に広域的な立地性が付加されながら、潟中の付加価値の高い潜在資源性を活かし切れていない平成20年代という、潟の活用状況の変遷が把握できた。(別紙参照：表-A 概要比較)

●昭和20～30年代：「潟集落社会」の利活用文化のあった時代



鳥屋野潟の自然の恵みを享受し、潟の水を飲み水や洗い物に使い、潟で遊び学び、景色を愛で、漁業や狩猟、採取業、潟端の農業など「潟集落社会」で地域スケールでの潟の利活用時代である。主に木舟を巧みに活用した自然と一体の暮らしの潟の利活用が伝統文化として残る。

●昭和 40～50 年代：広域の「都市」的利用で潟の直接的な利活用が衰退した時代

鳥屋野潟の水位を下げることで周辺約 1 万 ha の水田の乾田化が可能となり、農業の近代化が進み、その乾田化した土地の宅地化で都市形成が進むという大きな役割を果たしながらも、一方で農業と都市排水で潟の水質汚濁が深刻化し、広域スケールでの潟の「都市」的土地利用が進み、潟の直接的な利活用が大きく衰退した時代である。

●平成 20 年代：潟の潜在資源を次世代に継承し「潟ライフブランド都市の文化」世界発信時代

鳥屋野潟の水質改善が進み、白鳥が飛来する潟湖の魅力を有し、全国スケールでのニーズに対応できるスポーツ文化交流の県営公園や高速交通アクセスが整備されている。しかし、潟に近づく拠点は未整備で、利活用ニーズがあってもイベントの一時利用で終わっている。都心にある潟の潜在的な魅力資源と地域に残る潟利用の文化・技術・作法を次世代につなぐために、「潟共生・共有シェア型での利活用」をモラルとする「潟ライフブランド都市の文化」を生み出し、世界に発信する時代にしたい。

■今後の課題と展望

利活用の基盤となる湖底の諸問題の改善が、潟湖面の利活用価値を飛躍的に高めることは言うまでもない。その必然性をどう生み出すか。潟辺の親水性のある拠点や「潟ライフブランド」の水辺都市をどう開発整備するか。潟中の利用を高める船の導入をどう図るか、継承してきた潟漁業の持続進化をどう支援するかなど、卵と鶏との関係だが PDCA(計画-試行-評価-計画)検証の中で判断すべきと考える。

そのためには、①利活用を高めるニーズの把握、②潟利用の多様化、③潟利用の高度化、④潟利用の持続化を図る試行体制と資金確保が必要である。今後の取組課題は、共有の目標設定と様々な社会実験を重ねながらそれらの実証である。そのため本編後段にプロジェクトイメージを提案してある。

■表-A:鳥屋野潟の昭和 20 年代、40 年代、平成 20 年代概要比較

	事項	昭和 20～30 年代	昭和 40～50 年代	平成 20 年代
①	水位 ・水況	・+0.5 の海面～-0.8m ・S23 年に大型排水機場ができ水位が下がるまで海面とつながっていた	・-1.8～-2.5m ・周辺農地の乾田化と住宅等の都市化で排水池となる	・-2.5m ・内水洪水被害で潟周辺が冠水した(平成 10 年 8 月)
②	水面域、 ヨシ原 面積	・潟周辺の住宅から水面が見えた(小野恒彦氏:小張木在住)	・昭和 20 年と比較し水面面積に大きな変化がない(調査結果)	・現在のヨシ原は昭和 40 年頃には水面だった(調査結果)
③	水質	・飲み水、洗い水、風呂水など上水利用ができた水質だった	・生活排水が大量に流入し COD 値で環境基準(※湖沼B類型 COD の基準値 5mg/l 以下指定)の約 2 倍	・COD3～8・湖沼の環境基準 COD5 をクリアした水域もある ・環境用水などの導入が進む
④	上水/ 排水	・潟中から潟の水を竹管で引水 ・自宅井戸に引きろ過水利用 ・S35 年頃から簡易水道普及	・生活排水が流入。臭いや汚濁の発生を抑えるために浄化運動が始まる	・下水管接続が進み水質が改善されつつある ・湖底に腐泥層が残る

⑤	自然・ 景観	<ul style="list-style-type: none"> ・中心に大きな鳥屋野潟があり周辺になべ潟、はず潟、親松潟、その他池や清五郎川など大小河川、水路があった ・舟が行き交い、暮らしと花鳥風月の景色が潟八景として描かれている ・弁天一本松、清五郎一本松などが象徴的な存在になっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・桜並木や湖面利用が、市民の観光行楽レジャーの目玉で、周辺に舟小屋が10軒も立ち並び、無数の貸しボートの景色が見られた ・白鳥の飛来は銃砲等禁止後に増えたという 	<ul style="list-style-type: none"> ・潟南部に大型のスポーツ施設や産業、文化の拠点施設が入る県営公園が整備され、北部に自然科学館や図書館などの教育施設が整備された。さらに南部に広域基幹病院、スケートリンクなどの整備で潟周辺の入込客数が増大した
⑥	土地 利用	<ul style="list-style-type: none"> ・周辺は水田地帯と砂丘列に沿った集落が形成されている 	<ul style="list-style-type: none"> ・乾田化が進み、周辺は住宅や商業、都市的な施設用途になる 	<ul style="list-style-type: none"> ・潟の北部は住宅地利用 ・潟の南部は公共利用
⑦	暮らし ・食材	<ul style="list-style-type: none"> ・シジミやウナギが主たる漁獲販売物で、ヒシやハス、カモが食材利用される 	<ul style="list-style-type: none"> ・シジミ、ウナギ、ヒシやハスが不作 ・コイ、フナ放流 	<ul style="list-style-type: none"> ・メナダ(ボラの一種)やコイの料理がイベントで振舞われる ・コイの旨煮加工品が好評販売
⑧	水辺 施設	<ul style="list-style-type: none"> ・貸しボート舟小屋は最盛期10軒ほど。弁天橋兩岸に常設の棧橋がある ・潟端の各戸に洗い場がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・舟小屋や料亭などの施設は弁天橋付近から湖畔亭周辺に集中 ・舟も川辺の洗い場になった 	<ul style="list-style-type: none"> ・H26に最後の舟小屋栄徳荘が廃業で棧橋も撤去される
⑨	舟運	<ul style="list-style-type: none"> ・一時期外輪船舟運が亀田～沼垂間にあったが数年で廃業した 	<ul style="list-style-type: none"> ・企業や大学のヨットクラブがあった 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会実験的な環境舟運イベントが行われる
⑩	舟利用	<ul style="list-style-type: none"> ・各戸に木舟が3艘あり交通・運搬・暮しに利用されていた 	<ul style="list-style-type: none"> ・S46までヨット利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・とやの物語や環境舟運
⑪	農漁業 ・稼ぎ	<ul style="list-style-type: none"> ・潟辺の農業・漁業・採取業で十分生計をたてられたという 	<ul style="list-style-type: none"> ・潟の汚濁により、漁業は放流継続しつつも、ヒシやハスの採取業はS56頃以降、徐々に成り立たなくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・水質改善や調理などの試行で潟の魚の食材利用が始まりつつある
⑫	遊び・ 学びの スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・潟遊び湖水浴で子どもたちは周辺の小潟や水路で鍛え、自信がつくと潟中で泳げるように育った ・潟辺の子供には遊びと稼ぎは「楽しさ」で一体化していた ・操船技は遊びの中で体得した 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの個人化、孤立化が始まり、遊びのサポートがビジネス化する ・ヨットなどは企業や大学クラブ化でスキルが継承される 	<ul style="list-style-type: none"> ・水辺に近づく拠点や手段、体制が整備されていないこともあり、潟辺での遊びや学びは一時的なイベントの域を脱せない ・試みの潟中利用は確実に進化しつつある
⑬	行楽 ・レクリ エーション	<ul style="list-style-type: none"> ・観光行楽は弁天橋兩岸周辺を中心に行われ、一時200艘の手漕ぎ貸しボートの舟小屋や水景を楽しめる料亭などがあった ・釣り、花見、花火大会、ヨット 	<ul style="list-style-type: none"> ・春の桜祭りを軸に夏の花火大会、冬の白鳥など「潟の眺め」の魅力は市民の高い評価を得て持続していた 	<ul style="list-style-type: none"> ・潟辺の桜並木・サッカー・野球・食育花育・産業振興・イベントなど広域的な魅力が発信されている ・潜在資源力の高い潟中の魅力が発信しきれていない